

特集 新国立劇場完成

巻頭言 ● 8 新国立劇場の竣工に当たって ◆ 三浦朱門

座談会 ● 10 新国立劇場の竣工を迎えて

◆(出席者)吉武泰水／遠山一行／吉井澄雄／三輝容子／西澤敬一 ◆司会 霜島秋則

随想 ● 20 夢が叶ったことを信じて ◆ 加戸守行

エッセイ ● 24 聴衆も含めた総合芸術の殿堂に ◆ 青野照市

● 25 新国立劇場への期待 ◆ 森 英恵

● 26 新国立劇場と胎動する地方劇場群 ◆ 永曾信夫

施設紹介 ● 28 新国立劇場探訪

◆ 野田秀樹／高橋薫子／佐々木想美 ◆(案内) 筋内 剛

● 32 新国立劇場の設計意図 ◆ 柳澤孝彦

● 36 新国立劇場の概要

◆ 日本芸術文化振興会新国立劇場準備室

事業紹介 ● 42 財団法人新国立劇場運営財団

活動内容紹介 ◆ 財団法人新国立劇場運営財団

関連施設紹介 ● 46 東京オペラシティの

文化施設について ◆ 東京オペラシティアーツ株式会社

I ある日の学校訪問記

◆ 下館市立下館中学校(茨城県)

4 天然記念物歳時記「花」よみ

◆ 柵のシデコフシ自生地(愛知県)

表2 名作シリーズ

◆ 雪柳と海芋に波敷の壺

表3 文化財紹介 ◆ 四日市旧港港湾施設

カラー

6 ていふれい ◆ 松岡修造

48 焦点 文教施策

54 中教審ユース

64 ポイント生涯学習

◆ 放送大学の全国化

66 都道府県発 教育・学術文化・スポーツユース

◆ 青森県 ◆ 秋田県 ◆ 埼玉県 ◆ 沖縄県

68 どんな講座 こんな講座 大学の公開講座から

◆ 三重大学 ◆ 芝浦工業大学

70 現代スポーツあれこれ

◆ 国民体育大会

スポーツの文化装置としての機能

72 科学はいま 理工系へのいざない

◆ 東北大学電気通信研究所

75 鑑賞席 ◆ モダンデザイン展

ウィリアム・モリス展

76 ぼくたち、わたしたちのウィークエンド

◆ 国立山口徳地少年自然の家

78 海外教育ユース

80 文学のふもと ◆ 抒情小曲集

82 お知らせ

82 読者からのたより

84 編集後記

新国立劇場の設計意図

株式会社TAK建築・都市計画研究所代表

柳澤孝彦

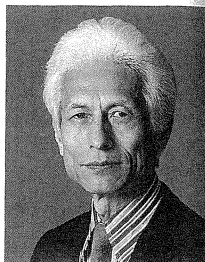
新国立劇場は、オペラ・バレエ・演劇及び新しいタイプの舞台芸術等の上演を主軸に、現代舞台芸術の多彩な公演事業をはじめ、実演家及び舞台技術者の研修、舞台芸術に関する内外の資料の情報収集及び保存・公開、そして諸外国との交流や地域文化振興等の諸事業を行うことを目的とした日本に初めて実現する国立劇場である。

多目的劇場が主流だった一〇余年前に国際設計コンペによって、建設への確かな歩みが始められたこの企画は本格的な専用劇場を目指すもので、日本の劇場史に専用劇場指向への大きな影響を与えつつ、一方では国際的なネットワークに劇場を位置づけるものとして注目を集めてきた。

このようにロビーや劇場に至るプロムナードが、建物の周囲に向けたオープンな構成をとって、そこに繰り広げる人々の様々な動きを舞台の演技よろしく外界に表出させている。夕闇の巷に明るく浮かび上がる新国立劇場の賑わいは、都市の中の舞台の一場面でもある。

配置計画は劇場性を備えた空間のネットワークを構図としてデザインされた。劇場の配置が全体構成を決める要であったが、甲州街道及び地下鉄（京王新線）を主とする車騒音・車両振動から十分に隔離された音環境の確保を最優先して、国道から最遠の敷地対角線の北側半分にオペラ・中劇場を集約配置し、その舞台裏をL型に背中合わせに結合させた。それによって舞台裏の動線が集約・合理化される一方、パブリックな空間は最も広く確保されるとともに、敷地に接する二つの道路（甲州街道及び渋谷区道）に向けて、適切な関係がデザインできる可能性を獲得できた。すなわち、二つの道路をはじめ敷地周辺に向けて極力オープンな空間をめぐることを意図して、周辺との都市的關係を密接にデザインした、ひらかれた劇場としての構えをつくるこ

四面舞台を持つオペラ劇場及び中劇場と、新しい試みの舞台芸術公演用の小劇場を併せ持ち、また多数の稽古場、研修施設等を配した六万九〇〇〇㎡に及ぶ新国立劇場は、あらゆるジャンルの現代舞台芸術に対応できる一大劇場コンプレックスとして、世界に稀有の規模と内容を備えたものといえよう。したがって新国立劇場の設計に当たっては、本格的な専用劇場の建設とあらゆるジャンルの舞台芸術の拠点づくりが主要テーマだと考えられた。何よりも身を震わすような感動やときめきが身近でなくなってしまう、高度に情報化が進展する現代において、劇場こそが生身の人間が演ずる真に人の力に出逢うことのできる「場」にほかならないということが、劇場設計の当初から現



やなぎさわ・たかひこ 長野県出身。建築家。竹中工務店を経て1986年の第二国立劇場国際設計競技で最優秀賞受賞を契機に独立。東京都現代美術館、郡山市立美術館、三鷹市芸術文化センター、東京オペラシティ（JV設計）などの文化施設を手がけている。1995年日本芸術院賞受賞。

とができた。

これは劇場固有の環境形成のために、舞台機能へ向けて求心的に密度を高める「内」への空間展開と、外界に向けて都市的關係を広げるパブリック空間の遠心的な「外」への空間展開が行き交う空間の構図は、訪れる人々を一気に日常から非日常の時空に誘い込む劇場性を随所に発揮させうる最適解だと考えることができた。

一方、本格的な専用劇場への設計アプローチは、舞台技術の設計に傾注された。

在も、そしてこれからも一時も忘れるわけにはいかない設計の心であった。このような設計の心が、新国立劇場の構えを決めてしまったといえよう。それは劇場空間において、舞台と観客が親しく向き合うがごとくに、都市に向き合う新国立劇場が構成のイメージとなった。すなわち、新国立劇場で繰り広げられる人々の交感の場が、向き合う都市を客席とする舞台となることで、ひらかれた劇場をその構えとした。新国立劇場のあらゆる場所や場面が、観客にとって舞台となる空間構成として、日常を超えた多様なイリュージョナルな空間を随所に創りだして、豊かな劇場性を備えた空間のネットワークを設計の骨子とした。オペラ・中・小の三つの劇場をとりまくパブリックな空間デザインに豊かな劇場性がつくり込まれていて、舞台と客席、演者と観客の關係に随所で反転が企てられている。メインエントランスへのプロムナードでは、きらめく広大な池の水面が人々を劇場へと誘う。水面は劇場内の賑わいをも映し出して、街行く人々へメッセージを送る。

後舞台を持つ四面舞台の舞台機構をはじめ、照明・音響にわたって重装備な舞台設備の追求が設計に反映される一方、多様な舞台展開への可能性を極度に高める舞台技術の応用設計が多面的な分析をもとに、新しい技術の開発を伴って進められた。

なかでも舞台展開における新しいニーズと技術対応については、舞台関連の専門家で組織する技術検討会で細を極めたとりわけ、舞台設備機能の固有化と新しいニーズ予測に対応するフレキシビリティとの調整は、極力客観性を保つよう努力がはらわれた。

ホール空間の設計では、有機的な舞台と観客との親密な關係を創りだすためにホール空間の親密な環境化に意が用いられた。最良の鑑賞条件を求めた、視線・音響・照明・椅子のデザイン・素材構成などの検討を統合したホール空間のデザインは、舞台と観客の芸術的な交感はあるが、観客相互が時空を共有するある種の連帯意識も十分働くことが大切で、舞台と観客、観客と観客といった多元的な意識の結び合いが、劇場の興奮を掻き立てるものだと考えに基づいて行われた。観客は単なる聞き手にとどまらず、

劇場の興感を創り出す共演者にほかならない。

●オペラ劇場

オペラ劇場では、舞台と客席の親密度を高める意図で、三層のバルコニーを舞台を抱え込むように三方にめぐらせて、その先端を舞台脇まで伸ばした構成をとった。平面は矩形の内郭と扇形の外郭を重ね合わせたものとして、扇形の広がり客席の収容能力を拡張し、舞台と客席間の距離の最大を三四・三mと比較的近い距離の範囲に、一八一〇席を収容した。一方、バルコニーの内郭がつくり出す矩形は、シューボックス形ホールに見られる豊かな音響のための有効な音の反射面形状に類似させて、音の反射の有効性を高めている。二つの平面形を重ねる設計は、良好な視線の確保と豊かな音の響きを併せ持つ新しいオペラ劇場の空間形が実現されたと考えている。

また、オペラ劇場における音響設計では、とりわけ舞台周りに添って初期反射に有効な曲面の反射面を適所にデザインして、初期反射音の効果を優先させた。

サイドバルコニー両端とプロセニウム直上のキャノピーが、いわばオペラ劇場の声帯ともいえるべき機能デザインといえる。また、音の拡散デザインも各所に行きわたらせて、豊かなホールトーンに意を配っている。

ホール音響設計に当たっては、いくつもの重要な音響設計要素が、たび重なるコンピュータシミュレーションや一〇分の一縮尺の音響模型実験によって、最適解が選ばれている。そして時には実寸のモックアップ制作の後、設計図書に記された内装はすべて木製で構成されたホールを意図して、豊かな自然の表情を無理に求め、音の響きに豊かな感応を期待した。これは防災上の数々の実験やコンピュータシミュレーションを重ねて、十分なる安全対策を施した上で、実現に至っている。防災上の避難計画では、不特定多数の人々が、速やかに安全に外部に避難できる端的方法をとった。十分な広さを持つ外部回廊を劇場ロビーに直結させて、避難階に準ずる安全圏をロビーと同一階に設けた。この回廊は大階段を介して一階とつながるものだが、外界に背を向ける。

●中劇場

中劇場は、プロセニウム形式とオープンステージ形式の可変が特徴的である。現代演劇などの多様な演出に対応するため、前通り、可動壁、可動天井の移動・開閉により、プロセニウム形式からオープン形式への転換が可能である。プロセニウム時の舞台と最後部座席の距離は二五m、オープン形式には一五mと至近距離が確保されて、演者のしぐさが手に取るように見える臨場感に富んだ客席構成としている。

●小劇場

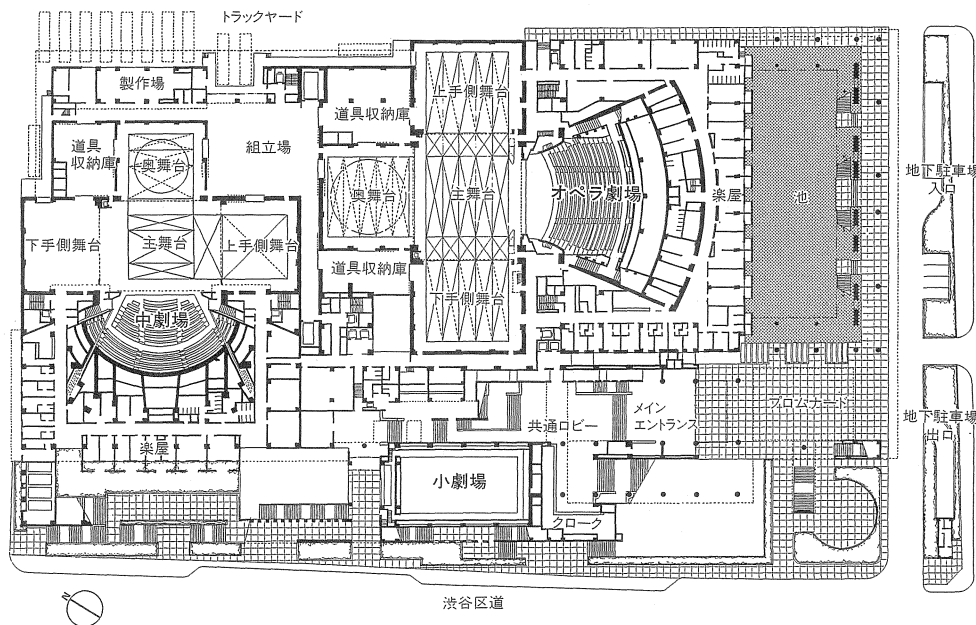
小劇場については、現代舞台芸術についての前進的な試みに対応して演技者と観客の間で最も親密な関係を保ち、舞台と客席空間の関係を最大限のフレキシビリティで可変が可能で、演目に合わせた自在な劇場空間が創りだせるのが特徴で

を展開させている。また、小劇場はサンクンガーデンを介してそのアクティビティを外界に表出している。京王新線初台駅の通路とつながったサンクンガーデンは、京王新線初台駅から小劇場への至近なプロムナードともなっている。これはまた、小劇場の安全な避難を保障する機能空間でもあることはいうまでもない。

●共通ロビー

共通ロビーは三つの劇場の動線の核である。すべての観客は、共通ロビーを基点としてオペラ・中・小劇場へアクセスする。そして、終演時にはそれぞれの劇場の興奮を抱えた人々が共通ロビー空間に会することとなり、そこはまさに観客のための大舞台となる。大階段を連ねた空間は、心の高鳴りを増幅する人と人との出逢いの場であり、オペラ・中・小三つの劇場に並ぶ四番目の劇場ということができる。コンペ以来一〇余年にわたる歳月に注ぎ込まれた計り知れない程の人の力と英知が、いま建築の命に昇華する劇的な瞬間だが、人々の芸術的活動が始まる時にこそ生き生きと鼓動する命を、期待をもって見据えたい。

新国立劇場 1階平面図



特集 文教施策の進展 平成9年度の展望

総説／文教施策の総合的推進／生涯学習／初等中等教育／高等教育／私立学校／学術研究／社会教育／スポーツ／文化／国際交流／協力／情報化の推進／文教施設／参考

であいふれあい 千葉麗子

都道府県発—教育・学術・文化・スポーツ・ニュース
青森県・長野県・岐阜県可児市・島根県

新連載

家庭教育のための取組
行ってみよう、やってみよう

編集後記

▽今月号の特集テーマは、「新国立劇場完成」です。
「待ちに待って、待たされに待たされた夢の新国立劇場、新国立劇場の建設に御尽力された加戸守行前日本芸術文化振興会理事長が、本特集にお書きいただいた随想の書き出しの部分ですが、新国立劇場の建設に携わった数多くの方々やオペラ・バレエ・演劇界の方々の気持ちそのものではないでしょうか。」
。新国立劇場完成バンザイ！
来る一〇月一〇日、オペラ「建・TAKERU」で、柿落とし公演の幕が開きます。ドキドキ・ワクワクしながらその時を待っています。特集の中にもありますように、新宿・初台の地に民間の協力も得て、劇場の街、文化の街が完成します。観劇はもちろん散策にもぜひ出かけてみてはいかがでしょう。▽今月号では、平成九年度の特集テーマ、各種記事について紹介し

ています。九年度は、六月に予定されている中央教育審議会第二次答申をはじめとして、教育職員養成審議会の答申、保健体育審議会の答申、二〇〇三年を目途に実施のための教育課程の改善を進めている教育課程審議会の間、また等が出される予定であり、教育改革の大きな節目の一年になります。特集として紹介していきますので、ぜひお読みいただきたいと思います。▽八年度の名作シリーズは、東京国立近代美術館の御協力で所蔵作品を掲載してきました。誌面を借りてお礼申し上げます。（下・ト）
●訂正 平成九年二月号四六頁「平成九年度大学及び高等専門学校卒業予定者に関する就職事務について（中略）」の記載中、前文二行目「……学生の就職機会の均等を期するため（下記のとおり申し合わせる）」は「……学生の就職機会の均等を期するため、高専卒業予定者の就職活動にも配慮し、下記のとおり申し合わせる」に記す（2）中「……」のためのための会場提供は……」にそれぞれ訂正します。

投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んでの感想、御意見等をお寄せください。
●「読者からのたより」投稿規定
①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記（誌上匿名可） ③掲載分には薄謝進呈
※文章を一部手直しさせていただきます。

送り先

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2
文部省大臣官房政策課
「文部時報」編集部
※電子メールでも受け付けております。
宛先名「jiho@monbu.go.jp」
●「文部時報読者アンケート」
文部時報読者アンケートは添付のはがきのほかに電子メールでも受け付けております。
宛先名「jiho@monbu.go.jp」

MESSC. 61 月刊

文部時報 3月号

第1444号

- 著作権所有——文部省©
- 発行所——株式会社 きょうせい
本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 03-5349-6666（営業部） 振替口座 00190-0-161
- 印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成9年3月10日印刷
平成9年3月10日発行

定価600円（本体583円）（〒84円）
年間購読料7,200円

- ・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
- ・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いいたします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 1997. ISSN 0916-9830 ●この刊行物は再生紙を使用しています。